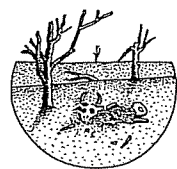


自然を守る共生の時代へ

剝削主義から永續への転換

槌田 劭



飢えと貧しさからの急速な転換

日本の戦後は、飢えと貧しさの中でスタートした。これが日本人の心にどのような影響を与えたかということ是非常に重要なテーマである。ともあれ、日本のほとんどの都市は、B29の空襲を受け、ほぼ灰燼に帰した。住む家を失い、衣類さえなく、多くの人々は、寒さにふるえて一九四五(昭和二十年)年の冬を越した。

モノ不足の中でも最も苦しかったのは、食の不足であった。重ねてこの年は不作であった。農村の働き手が戦

場へ動員され、年寄りと女性によって、からくも守られていた農作業を不順な天候が追い打ちしたのである。政府の米ビツ——食糧制度も底をついていた。遅配と欠配は、常態化し、代用食の脱脂大豆やイモなどさえ、配給は滞った。

飢えた都市市民は農村へ買い出しに走った。米は統制品であるから、ヤミ米は見つかれば、警察に没収された。農家もお金では米を分けてくれず、焼け残った着物などとの物々交換であった。当時は、昨今の狂乱物価どころではない猛烈なインフレで、お金の値打ちは下がる一方

だった。ちなみに警視庁が発表した一九四五年十月のヤミ米一升(一・四^キ)の値段は七〇円であったという。その基準価格が五三銭というから、実に百三十二倍の開きがあった。

それは強烈なインフレの故であったが、その原因は徹底したモノ不足にあった。翌四六年二月には金融緊急措置令によって、過剰な通貨を抑制する政策もとられた。

いわゆる新円制への切り替えであり、新円のシールの貼られたお札しか流通を認めぬ通貨統制である。これではモノ不足に加えて買うこともままならない。

大切なのは生きることであり、そのためには生きるために必要な最低限の物資、とくに食の確保こそが人々の関心と努力のすべてであるというような状態が続いていた。当時の都市市民の生活実感は、お金よりもモノ、そのなかでも食糧が第一という点で一致していた。

生きるために真剣にならざるをえない状況のなかでは当然である。この思考の基底には、一つの重要な法則が厳存している。それは生命を支えるには食が必要であり、最低限の食を確保できれば、生き抜くことができる、と

いうことである。この法則は生命にとって絶対的なものであり大切なものである。

この生存の法則は当時の都市生活の中で、すべての人々によって等しく実感され、生活実感的に受け入れられていた。それは理性的に理解されていたのではなく、飢えという衝動によって生活実践的に受け入れられたのである。

戦時中、戦争の遂行のため「欲しがりません。勝つまでは」と理不尽な禁欲を強いられて、侵略戦争にかりたてられた人々が、敗戦を機にその精神的支えを失い、しかも禁欲のタガが外れ、いわば精神主義から物欲主義に百八十度、回転する契機になったことは仕方がなかったのかもしれない。その物欲主義に回転するベクトルが、敗戦直後の厳しいモノ不足によって抑えられた状況は、引きしほられた弓につがれた矢にたとえることができる。物欲の力で引きしほられた矢は、どこへ向って飛ぶことになったのだろうか。

極限まで抑制された物欲は、その後の展開によっては、より強められつつ、解放放たれる時を待っていた。もし

も、でき得れば、その時こそ、人々は生存の法則の大切さを認識し、世界的な視野に立った新たな精神的支えと正鵠を得た生き方を模索すべきだったのだらう。しかし、歴史の流れはモノと金を求める方向へ急激に走り始めるのである。

一九五〇（昭和二十五）年六月、朝鮮戦争の勃発である。

北朝鮮軍は三十八度線を越えて南下した。これに対しアメリカ軍を主体にする国連軍は反撃を開始、本格的な戦争となった。この戦争の兵站基地であり後方支援の任を引き受けた日本には一大特需が起り、景気は一変する。いわゆる糸ヘンブーム、金ヘンブームである。糸ヘンと金ヘンのつく仕事・会社には需要が殺到し、金もうけの機会「朝鮮特需」が突然与えられたのである。

事実、一九五〇年夏に始まった戦争によって、鉱工業生産指数も民間設備投資も急上昇していった。翌年には早くも戦前の水準を突破している。総力戦を呼号していた戦時中の指数を一年でぬりかえてしまったのである。

これは激変ともいふべき展開である。休戦協定の結ばれた一九五三年には戦後の復興をなしとげ、都市生活も安

定し、世の中は大きく変貌しようとしていた。

この年、まことに興味深いことにテレビの本放送が開始されている。二月のNHKに続いて、八月には日本テレビである。まだ白黒放送であったが、早くも客寄せ用にレストランや喫茶店に設置され、電気屋の店先には、プロレスの見物で人だかりができる風景も現出した。

まさにテレビ時代の幕開けであるのと同時に情報的大量伝達が可能になるマスメディアの時代の端緒が開かれるのである。それは一方的に伝えられる情報によって、ただ受け入れるだけになり、自らの思考が制限され、疎外される時代の幕開けともなった。白熱球に変わって蛍光灯が各家庭に普及し始めたのもこの頃である。

翌五四年には、電気洗濯機、冷蔵庫、掃除機が「家庭電化の三種の神器」と呼ばれ、庶民の手には遠くとも、金さえ出せば入手できるようになった。そして、合成洗剤の普及に先駆けて、電気洗濯機のブームが起ったのは一九五五年であった。また電気釜の名で自動炊飯器が発売されるなど、生活の電化が広がり、「家電（家庭電化）時代の始まり」ともいわれた。モノが豊かになり、金回

りのよい時代へ向かって走るスタートラインについてののである。

人々は、モノ不足の苦しさから解放されて喜んだ。しかし、この日本の急激な戦後復興は、朝鮮戦争という隣国の不幸、血と涙の犠牲の上に成り立っていた。戦前の日本による朝鮮への圧制の苦しみの上に朝鮮戦争が重なり、再び苦悩の中に巻き込まれた時、日本は戦後復興のきっかけをつかむのである。

それは歴史の流れかもしれない。しかし、朝鮮戦争の原因の一つが日本による朝鮮の併合にあったことはいうまでもない。その犠牲者がさらに血と涙を流す時、その加害者日本が敗戦の痛手を癒した。

日本の戦後復興はこうした理不尽の上に成り立っている。罪深いことである。私達は隣国の人々の不幸への共感を忘れ、歴史的罪への反省を十分に行わないままに、モノと金を至上とする時代を開いたのである。当然、人々の意識もモノと金を志向するものへと変わっていくことは仕方がないことであった。こうした世の中を「もはや戦後ではない」とし、希望の将来を夢みただのである。こ

の夢は悪夢であり、罰せられることを免れない。

金主義の時代―その罪と罰

民主主義ならぬ金主義の時代。お金の、お金による、お金のための社会はこの昭和三十年代（一九五五年）に定着する。朝鮮特需に潤い、金主義に流れ始めた時から戦後民主主義の後退が明らかになった。破防法や防衛二法、日米相互防衛援助協定、教育二法など、いわゆる逆コースともいふべきものであった。一方、朝鮮特需で稼いだ金をもって、新製品、新技術の開発・導入が行われ、モノと金の拡大の成長期に入っていく。こうして政治・経済の体制は大きく変わり、いわゆる五五年体制が整えられる。

保守合同による自由民主党の成立、その後自民党は三十数年の長期政権となる。革新政党も、二大政党論に導かれて左右両派の統一による日本社会党の発足。共産党の極左暴力主義の精算によって、諸要求実現の経済要求と議会による改革路線の発案など、政治地図が動いた。労働運動も総評がスケジュール型の組合運動、春闘、秋

闘をスタートさせ、大幅な上げが実現する形となった。いわばこの五五年体制は、世を上げての金主主義体制へのシフトであった。

日本で初めての大型コンピュータが導入されたのが、やはり一九五五年である。レミントン社のユニバーク一二〇コンピュータが東京証券取引所に設置されたのである。モノと金が大きく動くようになった時、投機と情報が目ざされた時にコンピュータが導入されている点は極めて象徴的なことである。

また、同じ年に合理化の作戦総本部、日本生産性本部がスタートし、そして生産性の向上へ合理化の流れが進むことによって、企業は発展の道を踏み出す。その原資が朝鮮戦争での利益だった。このようにしてモノを作れば、売れる。売れるからまた作る。そして新製品を開発する。しかもその新製品は技術革新、合理化によって省力化、いわばわずかの金でたくさんモノが作れるというように回転していく。労働者の賃金も上がる。購買力も大きくなるから景気はますますよくなる。高度経済成長期に入っていく昭和三十年代半ばには、池田勇人内閣

油化学を象徴するプラスチックの雄・塩化ビニールとその関連製品を独占的に作って金もうけに励んでいたのが公害企業・チッソである。その製造工程で用いられた触媒の水銀が劣化して有機水銀となり、排水口から流れ出して水俣湾を汚染した。その結果が犯罪的大公害となった。

この大公害事件によって脅かされ、侵害されたのは（当たり前前の暮し）であり、尊い（いのち）であった。海辺に生き、漁に生きた貧しい漁民にとって新鮮な魚を食べる暮らしは当たり前のことであった。生まれてくる子の幸せを願い、新鮮な魚で栄養を考えたやさしい母親の気持ちも当たり前のものであった。多くの漁民が中毒となった。胎児性水俣病患者が多発した。そして、いのちが奪われた。

また、水俣病の原因がまだわからず、奇病として恐れられていた頃、岡山を中心に乳児に襲いかかった公害事件が、森永ヒ素ミルク中毒事件であった。金主主義の帰結によって、乳業会社も技術革新・合理化の企業努力を求められた。粉ミルクの大量生産、大量販売を可能とす

が発足し、所得倍増を打ち出し、日本経済はますます発展していくことになる。

しかし、一方ではエネルギー革命で石炭から石油へ、これまで肉体労働によってなされていたものがオートメーションと電化によってなされるようになり、そのことが自動制御技術をもたらした。科学技術の飛躍的発達とも相まって高度成長をたどるが、同時に、さまざまな局面で社会に大きな歪みをもたらした。その最たるものが政治の腐敗と経済界との黒い癒着である。主なものを挙げてお造船疑惑（一九五四年）、黒い霧事件（一九六六年）、ロッキード事件（一九七六年）、そして戦後最大の拡がりをもつ汚職となったリクルート問題（一九八八年）へとつながることになるのである。

さらに金主主義は、自然環境と人間の暮らしを歪めている。政治と経済も重要であるが、むしろ自然環境と暮らしのほうも、ごく普通の人間の暮らしが許されなくなり、いのちが脅かされることとなった。

戦後公害の原点というべき水俣有機水銀中毒事件は、朝鮮戦争の頃から高度成長期にかけて拡大していく。石

るため、品質劣化防止用に食品添加物が使われた。第二リン酸ソーダである。ところがそのリンに不純物としてヒ素が混入していたことが悲劇となった。

食をめぐる問題は粉ミルクにとどまらない。金主主義の世にあつて食の変質は避けられなかった。元来、食べ物は腐ることを特徴としているから量産量販は難しく、戦後の高度成長期までは地域自給と手作りの味が本流であった。しかし、量産量販による商工業の論理が食の領域に変質を迫るようになった。企業努力の成果は食品添加物の利用増とインスタント食品の開発であった。古くなくても商品価値の落ちぬように、合成保存料や合成着色料などの利用である。一九五五年から六五年までの十年間に厚生省の認めた食品添加物の品目数は約百種から約三百五十種へと三・五倍増、使用量はけた違いの増加である。食の商品化は食品添加物との二人三脚であった。使われた食品添加物の中には発ガン物質、遺伝毒物、催奇形性毒物、肝臓毒、腎臓毒など数多く、その後使用禁止になったものが約五十種もある。食品添加物利用が急増した一九六〇年から二十年を経て、ガンがついに死亡

原因の第一位となった。原因は食品添加物だけとはいえないが、主要な原因となっていることは否定できない。

日本農業の荒廃と人間の腐蝕

このような金主主義の世の流れが、いのちの危険を拡大するとき、商工業の繁栄の裏で農業は衰えることを余儀なくされていた。天地と共生の自然に支えられ、その恵みを与えられるのが農の本質であるが、この本質は金もうけにとってはその限界を意味する。商工業が技術革新、合理化を地下資源の乱消費の上に、金もうけの道を驕進し、企業利益と労働者の所得増を加速しているとき、農業は取り残されてしまう。世の中が金で動き、金を必要とする世となって、金もうけに不適な農業は変質と衰退を強いられた。社会的変動は一九五五年頃から始まった。現金収入を求めて季節労働・出稼ぎが盛んになり、やがて兼業化がすすむことになる。専業農家が減少し、片手間農家(二種兼業)が増え、その数の逆転は一九六一年、池田内閣による所得倍増の年であった。これは偶然ではない。爺ちゃん、婆ちゃん、母ちゃんの(三ちゃん

らぬことに全てをゆだねることの危険は大きい。五十年、百年は生命の歴史、人類の歴史の永さに比べて一瞬にもならない。農耕文明の一万年と比べても一瞬であろう。その一瞬に燃え尽きる文明を享受して、不思議とも思わぬところに利那主義がある。そして、化石燃料を燃やして発生する炭酸ガスが地球の気象を激変させる心配があるにもかかわらず、石油文明を享受するところに今だけよければよい、現在を楽しめればかまわない、という利己主義がある。

目先の便利さと自分の利益のために利用される物質は食品添加物に限らず、生命と生存を脅かしている。PCBも、DDTも、フロンガスもしかりと、挙げ出せばきりはない。目先の都合と飛び着いて、あれは便利、これは安いと買い込んだ耐久消費財も耐用年数がくれば確実にゴミとなる。「覆水盆に返らず」で産産量販による大量消費は大量廃棄・ゴミの山につながることを免れない。高度成長期の十年後に、(ゴミ戦争宣言)が出されることとなったこと(美濃部東京都知事、一九七一年はその一例であり、その後、ゴミ戦争は大都会から地方都市へ

農業)が流行語として登場するのは一九六三年であった。

農村・農業から都会・商工業へと人は流れて、農業後継者難は深刻となった。新規学卒者中の農業就業者数は一九六〇年頃に一人を割り、今では男女合わせても一年に二人余りとなっている。日本の食糧自給率が三〇%という惨たんたる現状も致し方ないが、私達の未来はどうなるのだろうか。敗戦後、食に苦勞し、食さえあれば生きられることを知ったはずであるが、豊かな時代の三十年余の時はそのことを忘却の彼方へ追いやったのだろうか。

金を求めて人々は生きる。都会に群れて、汚れた空気、汚れた水、汚れた食の上に都会で生きる。未来への不安、生命と生存を脅かす状況はまだ多くの人々にとって自覚されていないようだ。人は目先のことと自分のことしか考えられぬようにできているのだろうか。金主主義で動く商工業の繁栄する世は利己的であり、利己的な本質をもっている。

地下資源に依存する文明に永続はない。あと石油が何年もつか、それはわからない。しかし、何年続くかわか

と拡がっている。ここでも緑の山や農地、海がじゅうりんされている。局地戦争から全面戦争への拡大である。

商工業の繁栄、大量のモノと金に支えられて都市は成り立っている。その都市における生活は人々の健康を害し、生命を脅かすとともに、生きた自然を破壊する。利己主義と利那主義は生命の掟に反する横暴であり、人々と自然、生命の世界を傷つけるのである。この横暴から脱出しない限り、未来はないだろう。

問題は未来のことではなく、現在のことである。モノと金で支えられる世が、都市生活者を本当に幸せにしているのだろうかと問わねばならない。汚れた空気と水で生きる不幸、食品汚染などによるガン死の増加の現実などはすでにふれた。問題はそれだけではない。

昨今、マスコミで報道される小学生の自殺、中学生による殺人事件など考えられない事件が続発しているが、直接的な原因はさまざまあるにせよ、子供たちの心も体も病んでいるのは事実である。生きた自然にふれ、遊びそして生きる知恵を学ぶことが大切な時期に、生きるための知恵とは無関係な知識をつめ込まれ、競争を強

いられるのだから歪むはずである。厳しい管理教育、受験競争の強制される現状は金主義下に経済戦争の戦士を養成する目的の結果であり、子供の幸せを目的とした結果ではない。

子供たちだけが不幸なのではない。お年寄りもまた不幸である。経済戦争を戦った戦士が退役、つまり定年後の現実も不幸である。金のために、モノの製造に励んで、ゴミを増やすことに貢献した人々の老後が（粗大ゴミ）とは皮肉でもある。目ざわりでゴロゴロしており、役には立たぬが捨てるのにも手間がかかる、とはあわれではないか。経済戦争の猛烈社員、金もうけに猛烈に頑張ったが、生きる知恵や人生を幸せに楽しむ術を磨かなかった結果、自立性も失ってしまったのだろう。まさに「産業廃棄物」である。

男だけではなく、女の老後も大変である。長寿時代と言えば聞こえは良いが、死ぬに死ねない病気で長生き。その現実の中で、老人医療の有料化の流れは不安である。消費税も、物価上昇も、老後の生活を脅かす。社会は冷たい。モノ豊かな世で、子供たちも冷たい。高度成長の

真つただ中に「家つき、カーつき、ババ抜き」なる流行語が登場している。マイホーム、マイカーの豊かさの中で、老人は結構というわけである。

生きる知恵が大事にされない世の中は不幸である。食品添加物入りではあっても手軽なインスタント食品が簡単に入手できるようになって、（おふくろの味）は（袋の味）に置きかえられた。漬物もビニール袋に入ったものが安く買えるようになって、我が家の手作りが尊重されなくなる。「ババ抜き」と軌を一にして、（おふくろ）の尊敬の修辭（お）が消えたのも皮肉である。（亀の甲より、年の功）と誇れる生活の知恵が消えてしまったわけである。新しい品物を次々に買える「使い捨ては美德」の世となつては、モノを大切に利用し、繕ったり、直したり

の知恵も無用となつてしまった。老人の出番は奪われ、したがって生きている充実感も失われてしまう。使い捨てられているのが、（人間）なのである。

都市における、いわゆる便利な暮らしは、人々から知恵を失わせ、生きる力を奪ってしまった。ものごと全てを金で解決できると錯覚するところには、暮らしの知恵は無

用となるからであり、手足を使わず電化製品や自動車に頼ることができるからである。暮しの知恵の不必要なところでは、人々は教え合ったり、助け合ったりする必要もなく、冷たく閉ざされた生活を余儀なくされる。心も

体も病んだ状態に人々が墮するのもし方あるまい。都市の生活が行き詰まるのは、資源と環境の限界からだけではない。人間が腐蝕しているのである。

生きるための必要以上のものを求め、金勘定にあくせくする愚かしさから脱出することを課題としない限り、この人間腐蝕からの脱出はない。

「電気がなければ生きられない」「金がなければ生きられない」「情報がなければ生きられない」等々、都市の現実には、根なし草の不安がある。その不安の中で、人々は欲求不満に追い立てられている。モノを持てば持つほど、欲望は増大する。餓鬼道地獄をさまようように、満足することを知らない金主義の世は、欲求不満を増幅し、モノと金とを動かして金満化するが、人々は幸せから遠ざかっていく。欲求不満と確保した物量の重圧に人々は圧しつぶされているのだ。しかし、敗戦後の暮し

を振り返ってみても、もっと昔の祖先の暮らしを考えてみても、電気や金がなくても生きぬいた確かな歴史がある。食べ物があ、健康があれば生きられたのである。

真の豊かさへの視点

暮しの知恵の必要が失われ、全てが金とモノによって可能と錯覚するようになったところに、現在の不幸がある。知恵は人間を他の動物と区別する大きな特徴であり、知恵を大切にすることは、人間を大切にすることでもある。失われた暮らしの知恵を取り戻し、豊かにすることは人が幸せになるということの意味している。モノと金の支配する世の横暴を積極的に断念することは、滅びを回避することにつながるだけでなく、人々が幸せになるということである。

暮らしの知恵を大切に、横暴な暮らしを積極的に断念することは、禁欲的で貧しい暮らしで我慢することだと、しばしば錯覚されるが、そうではない。共生の自然と上手に付き合っ、安定して生きる可能性を大きくすることが出来る。貧しくなるのではなく、豊かになることなの

である。真の豊かさはモノにあるのではなく、人と人との関係、人と共生の自然との関係のありようの中にあるのである。スモッグを発生させる社会が、その横暴さの故に貧富や差別、支配と抑圧が拡大するとき、人々の中に貧しさ・欲求不満が渦巻くことになる。慎しく簡素な暮らしの中で、手作りの食卓を共に仲良く楽しく分かち合うところには満足・豊かさがあるだろう。

手作りの味噌を楽しんだとき、そのことを実感し得る。味噌を育て、味噌を仕込むようになって、十七年がたった。金で買う市販の味噌と異なり、おいしさは比べようもない。

我が家の食卓に並ぶ料理の材料は、生産者のわかる有機栽培のものである。生産者と消費者とが協力・提携し、互助・協同の関係の中で育てられ運ばれてくる。十数年間、私の関わり続けている「使い捨て時代を考える会」の動きの中で実現したものである。有機農業の運動は「顔と顔の見える関係」を強調するが、生産者と消費者がそれぞれの立場を理解し合い、励まし合う心で結ばれた関係を大切にすることとなる。

文化ではないのだろうか。貧しい金主主義の偏見から解放されたいものである。生きる知恵を豊かにすれば、世界はさらに広がることとなる。

食べ物は生きた自然から与えられる。健康も美しい自然と共に生きることで保たれる。その当たり前を前提として、助け合う人の輪の中で、暮しの知恵を取り戻さねばなるまい。人は社会的動物であり、ホモ・サピエンス（知恵あるヒト）なのである。知恵と工夫のあるところに、人間の生きる可能性がある。Resourcefulという言葉は、文字通りに解せば「Resources（資源）に富んだ」ということであろうが、辞書によれば「工夫に富んだ」とか、「知恵のある」という意味である。人間にとって生きる力の源泉は、知恵と工夫にあるということなのであろう。横暴な人為は破滅につながるが、自然との調和を大切に知る知恵に基づく人々には希望がある。

日本は資源小国だといわれる。石油がない。国土が狭く、人工が過密である。山が多く平野が狭い、などと歎かれる。与えられたものに感謝することを忘れて、歎きと不平不満を連ねるところに未来はない。石油はな

生産者の汗の努力に感謝し、無農薬の農産物を入手できることを消費者は喜び、消費者のその喜びを生産者は励みとするのである。生産者と消費者の共生である。全国各地に同じような動きが展開されている。そのような動きの中で育つ野菜はおいしい。土の中に豊かな生物世界、目に見えない微生物たちやミミズなどの共生の幸せが実現した時、その土に健康な作物が育つのだから、おいしい筈である。換金作物として、化学肥料で育てられた野菜とは比べられない。化学肥料で育てられる時には収量と金銭収入のみが配慮されて肥満・病弱となつてしまい、農薬の心配に加え、栄養価値も劣って味もよくない。人々の関係を豊かにし、土の中の共生世界を豊かにすれば、豊かな食卓に素晴らしい野菜が届くのである。

共生の自然にとけ込む知恵があれば、春の豊かさを楽しむこともできる。野に出て、鳥の声に耳を傾け、自然の草花に目を凝ませながら、ハコベやカラスノエンドウ、ノビル、タンポポ、ヨメナなど、野の幸を摘んで帰れば、野草料理の豊かさが食卓に実現する。金を出さなければ料理は貧しいのだろうか。金を出さなければ

くとも水はある。鉱石はなくとも緑はある。山の斜面があるから、水利が容易であつて知恵の働かせる余地が大きい。山の緑の中に生きるための必要を満たす可能性がある。与えられた風土に感謝し、与えられた条件をいかして生きることである。老若男女、それぞれの個性と能力を寄せ合い、助け合い励まし合つて生きる共生の社会が求められている。一人一人の自立・自律を尊重し合うところに、共飲、共感、共喜の社会がある。そのような社会は互助と協同が大切にされているにちがいない。利己主義と利己主義の使い捨ての時代を超えて、共生の時代を拓きたいと思う。

浮き草のような根無し草は枯れる。大地に根ざした社会と暮しには未来がある。その視点から現代文明を転換するために、私は、自然界すべての生物との共生を説く「縁の思想」、さらにあくなき人間の欲望を押しとどめる「業の思想」に強く着目しており、東洋思想、なかんずく仏法の先哲に学びたいと思う。

（つちだ たかし・京都精華大学教授）